

スペイン語推断文 —等位文としてのカテゴリー確立に向けて—

仲井 邦佳ⁱ

スペイン語推断文 (oraciones ilativas, 伝統的に consecutivas と呼ばれる) は, 研究者によって等位文とも従位文ともみなされてきた。スペイン言語アカデミーの *Nueva gramática de la lengua española* (2009) でさえその判断に躊躇している。しかし, この構文を統語的観点, 意味的観点から考察すれば, 等位文の一種として位置づけることができる。その具体的な接続詞は, *así que, conque, luego, pues, de modo (manera, forma, suerte) que* の5種類である (*entonces, por tanto, así pues, de ahí que* 等は推断接続詞ではない)。さらに等位文の下位区分としては, 逆接文 (*pero*) とともに単純等位文 (*coordinadas simples*) に属し, 連結文 (*y*) と離接文 (*o*) からなる多重等位文 (*coordinadas múltiples*) に対立する。

キーワード：推断文, 推論文, 等位文, 従位文, 従属文

はじめに

スペイン語統語論において複文の構造は近年ますます研究が進んでいるが, その程度はそれぞれの種類によって異なる。等位文では連結文 (代表的接続詞 *y*) や逆接文 (*pero*), 従位文においては条件文 (*si*) や原因文 (*porque*) は比較的研究がされている。しかしながら, 推断文 (oración ilativa)¹⁾ (*Pienso, luego existo*) は明確な定義が与えられて記述, 分析がされているとは言い難い。推断文は, ラテン語では ERGO, Igitur, Itaque 等の接続詞がそれに相当する (COGITO ERGO SUM)。しかし, いずれの接続詞もスペイン語では継承されなかった。

推断文は, 従位文とされることもあれば等位文とみなされることもあったが, スペイン言語アカデミーの *Nueva gramática de la lengua española* (2009)

では両論が併記されている。また, 等位, 従位のいずれでもないとする考えもある。

本論文では以下のことを明らかにする。①複文構造の一つとして推断文のカテゴリーは必要か。②必要ならば, それは等位文か従属文か (またはそれ以外か)。③さらに, その下位区分としてどのように位置づけがされるか。④推断の接続詞は具体的にいずれか。⑤最後に, 等位文内での推断文の位置づけと推断文独自の特徴は何か。

本論は, 結果的に推断文を等位文の一種とするが, 広範に例文を集めて分析したものではなく, その前提となる仮説を提案するものである。

1. 推断文分類の変遷 (先行研究)

1.1. スペイン語アカデミーの位置づけ

それではスペイン語文法研究において推断文がどのように扱われてきたかを見ていきたい。まず最初にスペイン語アカデミーが行ってきた位置づけを概

i 立命館大学産業社会学部教授

観する。

Gramática de la lengua española (1931, 以下 *GRAE*) では、伝統的に複文全体を以下のように等位と従位に分類していた²⁾。

- ・等位 (coordinadas) : 連結文 (copulativas), 離接文 (disyuntivas), 逆接文 (adversativas), 結果文 (consecutivas), 原因文 (causales)
- ・従位 (subordinadas) : 条件文 (condicionales), 譲歩文 (concesivas), 比較文 (comparativas), 結果文 (consecutivas), 原因文 (causales)

この区分はラテン語文法から引き継いだものであり、叙法との関係が深い。ラテン語では等位では直説法が、従位では接続法が使用される傾向があった。もっとも完全な対応があるわけではなく、例えば比較文や条件文は直説法も接続法も取っていた。スペイン語では構文と叙法の関係はさらに薄くなっている。

このようにラテン語文法の伝統に引きずられたため、原因文と結果文は、その種類によって等位または従位に分裂して振り分けられていた³⁾。ここでいう「結果文」とは、後に見るように広義のものであることに注意されたい。

さて、その結果文の具体的な接続詞としては、*GRAE* (1931) は以下のものを挙げている。

- ・等位の結果文 : *pues, luego, conque, por consiguiente, ahora bien, así que, etc.*
- ・従位の結果文 : *tan(to)...que, tal...que, así...que, de modo que, de manera que, en grado que, conque*

上記でアカデミーが「等位の結果構文」(“ilativa”とも呼ぶとも言っている。§348) としているものが、本論の対象である「推断文」である。

ところで、*conque* は、等位結果文の個所 (§348) でも従位結果文の個所 (§432) でも挙げられてい

る。しかし、「従位よりもむしろ等位」(“más bien coordinante que subordinante”) と述べている (§432.f)。*GRAE* (1931) は、形式的に *que* に由来するものを従位の結果接続詞とみなし、*conque* を従位とした。しかし、その統語的働きは等位であり、そのためにこのような分裂状態の記述になったのであろう。

しかし、*Esbozo de una nueva gramática de la lengua española* (1973, 以下 *Esbozo*) において言語アカデミーは、一部の複文の伝統的分類にいくつかの重要な修正を加えた。*GRAE* (1931) で等位文と従位文に分断されていた原因文 (causales) と結果文 (consecutivas) はともに従位文と位置づけられることになった (3.22.3.注4, 3.22.4.)。

結果文については、これを第1類 (3.22.3) と第2類 (3.22.4) に大別するが、前者は *GRAE* (1931) で等位の結果文 (= 推断文) とされていたものに相当する。つまり、以前の等位の結果文はそのまま従位に移されたが、以前の従位の結果文との区別は維持されている。結果文を全て従位とみなした理由は、ラテン語文法のくびきから脱したためであろうが、これらが他の等位文 (結合文や離接文) と違い、文と文しか繋ぐことができない性質であることも挙げている (3.22.3.注4)。

第1の結果文の接続詞 (句) として *pues, luego, conque, así que, así pues, por (lo) tanto, por consiguiente, por esto (eso)* を挙げている。これらは以前、等位の接続詞とされていたものとはほぼ同じである。第2の結果文とは伝統的に従位の結果文と呼ばれてきたいわゆる関連構文である。具体的な形式としては *GRAE* (1931) と (*conque* を除いて) 同じ *tan(to)...que, tal...que, así...que, de modo (manera) que, en grado que* を挙げている。*Esbozo* (1973) で *conque* は従位のところでは挙げられていないので、等位としてのその位置づけを確たるものにしたのだと思われる。

さて続いて、*Nueva gramática de la lengua española* (2009, 以下 *NGLE*) での扱いを見てみよ

う。推断構文 (construcción ilativa) を「原因構文」(construcción causal), および「結果構文」(construcción final) と共に46章で扱っている。原因文と目的文と一緒に推断文を扱った理由は、これらが「原因—結果」を表現する形式であること、つまり「原因性」(causalidad) を基にする構文であることだと考えられるが、統語的には前者2つ(原因文と目的文)と後者の推断文はかなり異なる特徴を有していると言える。事実、NGLE (2009) 自身、同章で「原因構文と目的構文間の統語的、意味的繋がりは、これら2つのタイプの文と推断文との繋がりにより大きい」(“Son mayores las conexiones sintácticas y semánticas que existen entre causales y finales que las que establecen entre estos dos tipos de oraciones y las ilativas”, 46.1a) と述べている。また、推断の接続詞は、目的文または原因文よりも「より高い談話的結合レベルに」(“en un plano más elevado de la trabazón discursiva”, 46.11h) 置かれると言っている。つまり、同一の章で3つの構文を扱っているものの、推断文は他の2つ(原因文と目的文)とは比較的異なっていることを認めている。

NGLE (2009) が推断文を等位文とするか従位文とするかについては、その態度は明確ではない。基本的には従位文としながらも等位文である可能性にも言及する。「推断文は等位文と一緒にする必要があると理解する研究者もいる」(“Entienden algunos autores que las oraciones ilativas se debe agrupar con las coordinadas”, 46.11g)。確かに、推断文は他の等位文(連結文や離接文)と似た特徴を持つ。そこで、第31章「接続詞、その統語グループ、等位構造」(“La conjunción. Sus grupos sintácticos. Las construcciones coordinadas”)においても推断文は研究者によって等位文とする者と従位文とする者がいることに言及している(31.1e, 25.13ñにも)。しかし、同じ章の中で(31.1h)推断接続詞を条件や原因の接続詞とともに従位接続詞に含めているので、結局はNGLE (2009) は推断文を従位文とみなして

いると考えられる。

NGLE (2009) が推断の接続詞として挙げているのは、*conque* と *luego* である。さらに、接続詞句として *así (es) que, de modo que* を挙げている。それぞれの例文は以下の通りである(46.11b)。

- (1) Tú no eres la persona más indicada para hablar de ese asunto, *conque* mejor es que no digas nada.
- (2) Pienso, *luego* existo.
- (3) Cuando nos levantamos estaba nevando, *así que* aplazamos el viaje.
- (4) No había nada más que decir, *de modo que* me levanté y me fui.

しかし、別の個所では推断の機能を持った *pues* も扱っている(NGLE, 2009: §12m-s)。

一方、*Esbozo* でも従位文に位置づけられた関連の結果構文 *tanto...que* 等は、別に第45章「比較構文・最上級構文・結果構文」(Construcciones comparativas, superlativas y consecutivas) で扱っている。つまりNGLE (2009) で言語アカデミーはようやく本来の推断文 (ilativas) を広義の結果文 (consecutivas) から完全に独立させることになった。

ここまで見てきたように推断文の所属は、等位と従位の間で揺れている。簡単にまとめると以下のとおりである。GRAE (1931): 等位文 ⇒ *Esbozo* (1973): 従位文(ただし、「第1類」) ⇒ NGLE (2009): 従位と等位で揺れる。

1. 2. その他の先行研究

ここまで推断文を等位とみなすか従位とみなすかを見てきたが、いずれともみなさない研究者もいる(Alarcos, 1994; López García, 1994, 1999; Hernández, 1984;⁴⁾ etc.)。等位でも従位でもないとは「並置」(yuxtapuestas) とみなすという意味である。

Alarcos は *Gramática de la lengua española* (1994) で「それらによって示唆される意味は通常、

推論、結果、引継ぎであり、一般的にそれぞれの文の連続する意味から由来するので、実際には並置的グループである」(“En realidad son grupos yuxtapuestos, ya que el sentido sugerido por ellos suele ser ilativo, consecutivo, continuativo, y en general proviene de los contenidos sucesivos de cada oración”, §385) と主張する。その理由として接続要素は文の意味を変えずに省略できるからであり、それらはむしろ「先行する文脈で表現されたことに前方照応的指示をする副詞」(“adverbial de referencia anafórica a lo expresado en el contexto precedente”, §385) の役割を果たしているとする。

このように推論文を並置文とみなすので、等位文は3タイプのみからなる(結合文、離接文、逆接文)としている(Alarcos, 1994: §379)。しかし、後に見るように (§3.6.1.) *luego* や *así que* という接続詞を *por tanto* 等の副詞と混同しているところに問題がある。

さらには、等位、従位、並置のいずれでもない4番目の可能性がある。それは、Rojo (1978) で確立された「二極文」(oración bipolar) に推論文を位置づける立場である。Jiménez (2011) は従位接続詞を主に扱った研究ではあるが、そこで推論文を二極文に分類している (p. 43, etc.)。すべての接続詞を挙げているわけではないが、その論文においては具体的に *luego*, *entonces*, *pues* を推論文の接続詞の例として挙げている (pp. 43, 36, etc.)。

その他の先行研究としては、Alcina & Blecua の *Gramática española* (1975), Moreno de Alba の “Coordinación y subordinación en gramática española” (1979), Martínez の “Conectores complejos en español” (1984-85) や *La oración compuesta y compleja* (1994) などがあるが、いずれも推論文を基本的に等位文とみなしている。

最後に *Gramática descriptiva de la lengua española* (1999) を見ておく。まず、第41章「等位」(著者は José Camacho) では推論文を全く扱っていない。等

位文として、連結文、離接文、逆接文の3つのみを挙げている。しかし、58章(著者は Alfredo Álvarez) では「結果構文」(Construcciones consecutivas) を扱っている。ここでは *GRAE* (1931) と同様、従位文と等位文に大きく二分する⁵⁾。従位の結果構文とは、「相関構文」*tan(to)...que, tal...que, así...que* 等のことである。一方、等位の結果構文 (§58.6) としては *luego, conque, así que, de modo (manera, forma, suerte) que* があるとす。

1.3. 推論文と結果文

既に見たように推論文は伝統的に結果文 (consecutiva) と呼ばれてきた (*NGLE*, 2009: 46.11b)。正確にいうと「結果文」をより広い意味で用いており、その下位区分が「推論文」と「相関の結果文」であるとしてきた研究は多い (*GRAE*, 1931; *Esbozo*, 1973; Álvarez, 1999; Jiménez, 2011; etc.) *NGLE* (2009: 41.11, p. 3513) の例文を引くと、

- (5) Los vecinos hacían ruido, *así que* llamamos a la policía. —推論文 (広義では結果文)
- (6) Los vecinos hacían *tanto* ruido *que* llamamos a la policía. —結果文 (狭義の結果文)

(5) が推論文で (6) が結果文であるが、両者が同じ意味ではないことは明らかである。結果文 (6) には強調、誇張の意味がある。第1相関詞 *tanto* に第2相関詞 *que* が呼応しており、「騒音の程度が警察を呼ばなければならぬ」ほどであったことを表現している。一方の推論文 (5) にはこの意はない。統語的には結果文は相関構文、つまり二極文 (oración bipolar) である (cf. Nakai, 2018)。それに対して推論文は等位文 (oración coordinada) である。

このように上記の2文の構造と意味は全く異なるものである。独立したカテゴリーとして推論文を設ける必要がある。本論では「結果文」を狭い意味の「相関の結果文」に限定し、相関でないものを「推論文」と呼び、本稿の研究対象としている。

表1 推断文の位置づけとその接続詞

	構文の種類	推断の接続詞（句）							
		luego	así que	conque	pues	así pues	entonces	de modo (manera, forma, suerte) que	de ahí (aquí) que
GRAE (1931)	等位	○	○	○	○			○	
Esbozo (1973)	従位	○	○	○	○	○		○	
NGLE (2009)	従位 ～ 等位	○	○	○	○	△?	△	○	○?
Alcina & Blecua (1975)	等位	○	△	△	○			△	△
Moreno (1979)	等位		○		○				
J. A. Martínez (1984-85)	等位	○	○	○	○	△		○	
Alarcos (1994)	並置	△	△	△	△				
Álvarez, (1999) =GDLE, cáp. 58	等位	○	○	○	△	△	△	○	△
Jiménez (2011)	二極	○			○	△	○		

○：接続詞として記述

△：扱ってはいるが、接続詞としてではない（談話標識等）。

空欄：言及なし

1. 4. まとめ

最後に先行研究での推断文の統語的位置づけとどの接続詞（句）がその構成員とされているか、一覧表にして見てみよう（表1）。

言うまでもないことであるが、それぞれの研究者によって推断文の定義が異なるので上記の表はそのことを考慮する必要がある。いずれにせよ全体の傾向は把握できるであろう。それぞれの接続詞（句）の記述は、後に §3で行う。

2. 推断文の文法的特徴

推断文を意味的に定義すれば、「話者が前もって表現したとそこから論理的に、または自然に生じる結果」を表現する形式と言えよう（NGLE, 2009: 46.11.a; etc.）。それでは本節で推断文の文法的特徴を考察し、最終的に等位文であることを明確にした

2. 1. 可動テスト（prueba de movilidad）

複文が等位文か従位文かを判断するために「可動性テスト」（prueba de movilidad）がよく用いられる。可動性テストとは、複文を構成する2つの文の位置を変えることであるが、研究者によってその意味するところと用語が様々であるために混乱が見られる。本論では以下のようにこの操作をさらに以下の2つに分ける。

- ① 転倒テスト（prueba de reversibilidad）：前後の文を間にある接続詞を後半部の冒頭に置いたまま位置を入れ替える。
- ② 交換テスト（prueba de intercambiabilidad）：前後の文の間にある接続詞の位置をそのままにして前後の文のみの位置を入れ替える。

まず①を例文で見よう。

- (7a) Saldremos *aunque* llueva.
 (7b) *Aunque* llueva, saldremos.
 (8a) Ya es tarde, *pero* acabaré de explicar este tema.
 (8b) **Pero* acabaré de explicar este tema, ya es tarde.

このように従位文は転倒が可能である (7a → 7b) が, 等位文は転倒操作を行うと非文になってしまう (8a → 8b)。一方, ②では,

- (9a) Juan trabaja en un banco y María estudia Medicina.
 (9b) María estudia Medicina y Juan trabaja en un banco.
 (10a) No saldremos *porque* está lloviendo a cántaros.
 (10b) *Está lloviendo a cántaros *porque* no saldremos.

上記のように等位文は交換が可能であるが (9a → 9b), 従位文では意味をなさない文となる (10a → 10b)。この操作を図示すると以下ようになる。

- ① 転テスト: $X \& Y \rightarrow \& Y, X$
 ② 交換テスト: $X \& Y \rightarrow Y \& X$

これらの操作は, 接続詞と後続する文との「結合の種類」を分析していることになる。ある複文が前者のテストに適合すればその複文は従位文であり, 後者のテストに適合すれば等位文である証拠となる。これらの2つのテストは相互補完的なものであり, 片方が可能ならばもう片方は不可能になる。

2. 1. 1. 転倒テスト

(Prueba de revertibilidad)

さて具体的に推断文が等位か従位かをテストしてみよう。

- (11a) Ella ya lo sabía, *así que* alguien se lo había dicho. (NGLE, 2009: 46.11i)
 (11b) **Así que* alguien se lo había dicho, ella ya lo sabía.

上記のように, 前半部と後半部を入れ替えることができないのでこの複文は等位文であると判断できる。

2. 1. 2. 交換テスト

(Prueba de intercambiabilidad)

次に推断文に交換テストを施してみよう。先ほどと同じ例文を使用する。

- (11a) Ella ya lo sabía, *así que* alguien se lo había dicho. (NGLE, 2009: 46.11i)
 (11c) Alguien se lo había dicho, *así que* ella ya lo sabía.

これら2文の意味するところは当然異なる。しかし, 統語構造が適正かという観点から言えばどちらも適切な複文であり, *así que* という等位接続詞を間に挟んだ構造は等位構造であることが確認できる。

2. 2. 接続要素の連結の可能性 (Combinabilidad)

ある複文を等位か従位か判断するために「接続詞連結可能性」(combinabilidad) を用いる研究者は多い (Jiménez, 2011; López, 1999; etc.)。2つの接続詞の連結の可能性は論理的に考えて4とおりである。すなわち, ①接続詞が等位か従位か, ②連続の前に来るか後にくるか, $2 \times 2 = 4$ で全部で4とおりとなる。具体例とともにこれら4つのケースを見てみよう⁶⁾。

- ① 等位 → 従位: 可能

- (12) Estudia, *pero si* no lo haces, por lo menos trabaja.

② 従位→従位：可能

- (13) *Estoy preocupado, aunque, si eso es verdad, la cosa no sería para tanto.*

③ 等位→等位：不可能

- (14) **Los discos estaban rayados y pero no me enfadé.*

④ 従位→等位：不可能

- (15) **Los discos estaban rayados aunque pero no me enfadé.*

上記のうち①と②の組み合わせは可能であるが、③と④の組み合わせは不可能である。要するに後の接続詞が従位である組み合わせのみが可能ということになる。

しかしながらこのことを少し考えてみると、接続詞連続テストは既に見た可動性テストの変種に過ぎないことに気づくであろう。なぜなら、①でも②でも後半の文はさらに複文となっている。つまりその構造は、

全体の文 = 文₁ + 文₂ さらに、文₂ = 文₃ + 文₄

と図式化することができる。もし文₂の文頭に何らかの接続詞が現れるとすればそれは必然的に従位接続詞である。なぜならば従位接続詞のみが複文₂の文頭に來ることができるからである。このことを例(13)で説明するならば、*Estoy preocupado, aunque, si eso es verdad, la cosa no sería para tanto*という全体の文の中にさらに別の複文 *aunque, si eso es verdad, la cosa no sería para tanto* が埋め込まれていることになる。さてこちらの文に注目すれば、さらにその内部に *si eso es verdad* が埋め込まれている。そしてこの従位節はその位置を変えることが可能である。つまり、*si eso es verdad, la cosa no sería para tanto* でも *la cosa no sería para tanto si eso es verdad* でも可能である。結局は、*aunque* と *si* という

2つの接続詞の隣接は「偶然」によるものであってこの2つは、見かけ上、隣接はしているものの構造レベルでは別の階層に位置するものである。*aunque*の方が*si*よりも1階層上に位置している。この意味で「連結可能性」(combinabilidad)は便宜的に使用しているもののあまり適切ではない。「隣接性」(contigüidad)の方がより適切かもしれない。結局は、このテストは「転置テスト」の変種に過ぎないといってよいであろう。

一方、(14)では(13)とは異なり*y*と*pero*は全く同じ階層に属することになり、ある統語環境で同時に出現することは不可能である。言い方を変えれば、*y*と*pero*は同じ範例(paradigma)に属する“IN ABSENTIA”の関係にある。

それでは、推断文の実態はどうであるかを以下の例とともに確認したい。

- (16a) *Erasmus está enfermo, así que aunque hace muy buen tiempo, no sale.* (Moreno, 1979: p. 40)
 (16b) **Erasmus está enfermo, y así que no sale.*
 (16c) **Erasmus está enfermo, porque así que no sale.*

(16a)の例文で非文ではなく、*aunque*は従位接続詞であることは確かであるので上記の①、②のいずれかに該当する。しかし、従位接続詞には等位でも従位でも前置可能なので*así que*が等位接続詞句か従位接続詞句かは、この例文から判断することはできない。

一方、(16b)の例文においては、接続詞*y*は等位であることは間違いないので上記の①、③のいずれかの該当する。そして実際にこの例文は非文であるので自動的に③の組み合わせであり、ゆえに*así que*は等位接続詞句であることが帰結できる。また、(16c)では*porque*は従位なので②か④の可能性がある。そして実際にこの文は非文であるので④に該当する。

2. 3. モダリティの制約 (Restricciones de la modalidad⁷⁾)

ある複文が等位であるか従位であるか見極める方法として後半部のモダリティの制限を使用することがある。複文後半部に訴え機能 (función apelativa) を持った強い表現 (命令文, 感嘆文, 疑問文, 等) が来ることができるのは等位の証拠であると考えられる研究者は多い (NGLE, 2009: 46.11f; Martínez, 1984-85: p. 78; Moreno, 1979: pp. 45-46; Camacho (1999): 41.2.1.2)。

① 等位接続詞 + 命令文

次の例は全て等位文 (連結, 離接, 逆接) であるが, その後半部が命令文である。

(17) Reúne el dinero y paga lo que debes.

(Moreno, 1979: p. 45)

(18) Compórtate bien o sal de aquí. (*ibid.*)

(19) Ve adonde quieras pero regresa temprano.
(*ibid.*)

推断文の場合, 前半部に命令文が来るとはその意味特性からいって不自然であるが, 後半部が命令文であることは全く問題ない。

(20) Es tarde, así que vete. (Martínez, 1994: p. 45)

このように命令文は, 等位接続詞には後接するが, 従位接続詞に後接しない⁸⁾。つまり, 複文後半部に命令文が来れば, その複文は等位文である根拠の一つとなる。

以下, 同様に推断の接続詞に感嘆文と疑問文が後接する例も挙げておく。

② 等位接続詞 + 感嘆文

(21) Ya no quiero trabajar, pero cobramos poca pensión, así que ¡qué le vamos a hacer!

③ 等位接続詞 + 疑問文

(22) No me ha llegado la convocatoria, así que ¿a qué hora es la reunión? (NGLE, 2009: §46.11f)

ここまで本節で見てきた特徴は, 結局のところ推断文は叙述核に対して常に「外的」である (NGLE, 2009: 46.111) という特徴に由来すると考えられる。これは等位文の基本的性格である。

3. 推断接続詞 (句)

それでは, 具体的に推断の接続詞とはいずれであるのか, その範囲を定めてみたい。既に見たように (§1) 研究者によって様々であった。

3. 1. Así que

Así que の意味的な特徴は, 推断の接続詞の中でも主観的, インフォーマル, 口語的であることである (Montolio, 2001: pp. 102-104)。相関構文 *así... que* の *así* と *que* が結合して形成された接続詞である。*Así es que* もバリエーションとして使用される (NGLE, 2009: 42.12j)。また, メキシコおよび中米の一部の国の口語では *así es de que* と *dequeísmo* も生じる (NGLE, 2009: 42.12j, 17.9o)。

(23) Le aseguro que puedo dispararle antes de que me maten, así es que mejor nos vamos respetando. (NGLE, 2009: 46.12j)

このことから *así que* はまだ完全に固定化した成句ではないと考えられる。また, 一般的に接続詞は強勢がないのが普通である。しかし, *así que* はアクセントを保っている。アクセントがあるからといって直ちに接続詞ではないとは言えないが, 文法化が完全に終了していない接続詞句であるとは言える。

3. 2. Conque

Conque は推断接続詞の中でもっとも口語的な形式とされ、意味的には「皮肉、懐疑、非難」を表すことが多い (NGLE, 2009: 46.12.1)。その起源は、NGLE (2009: 46.12d) によれば「前置詞 *con* + 従属の接続詞 *que*」であるとしているが、*conque* の意味が構成要素の意味に合致しないことを認めている。一方、GRAE (1931, 432.f) は「前置詞 *con* + 関係詞 *que*」の結合であると述べている。こちらの説の方が説得力がある。なぜなら、*con lo que* (中性関係代名詞) は推断の意味に近いことを NGLE (2009: 46.12e) も認めており、それならば *conque* の *que* は接続詞ではなく関係代名詞であると想定した方が *conque* の機能が理解できる。

その起源がいずれにせよ、現代の *conque* は推断の接続詞として機能していることは間違いなく、*con que*₁ (接続詞) とも *con que*₂ (関係代名詞) とも異なることは以下の例文からも明らかであろう。

- (24) Me conformo *con que* me llames de vez en cuando. (NGLE, 2009: 46.12d) — 接続詞 *que*₁
- (25) Era sorprendente el placer *con que* comía todo aquello. (NGLE, 2009: 46.12d) — 関係代名詞 *que*₂
- (26) Ya sabes que yo estoy al margen de esa cuestión, *conque* no me preguntes nada. (NGLE, 2009: 46.12e) — 推断の接続詞 *conque*

3. 3. Luego

推断の接続詞の中ではもっとも文語的なニュアンスを持つ語であり、日常的にはあまり使われない。そのため多くの場合 *Pienso, luego existo* という例文が引用される。

ラテン語 LOCO (LOCUS の奪格) に由来する。ラテン語では「そこで」と場所を指す語であったが、スペイン語では「後に」と時の意に移行した。もちろんこれは現代でも残っているが (強勢あり)、さらに発展して推断の接続詞になるに至り、その際に

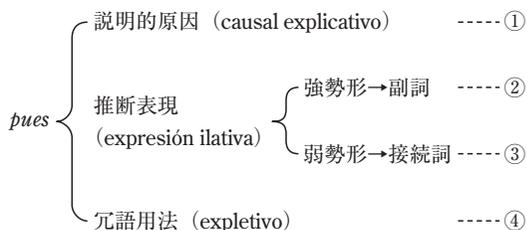
強勢を失った (Martínez, 1984-85: p. 79)。

3. 4. Pues

ラテン語の副詞・前置詞 POST に由来する (POST > *pues*)。語源的に「後で」と時を意味していたが、そこから派生して現代スペイン語では多様な意味を表すようになっていく。その用法の地域差が顕著であり、メキシコおよび中米の口語で特に頻出する傾向にある (NGLE, 2009: 46.12a)。

このように *pues* は非常に多機能な語であるので、その分析に際してはまず、適切な分類をする必要がある。具体的には、副詞、接続詞、そして談話標識として使用されるが、接続詞としての用法も「推断」と「原因」と大別して2つの用法が認められる (Jiménez, 2011: p. 32, 注57)。

Pues の用法を以下のように分類して考察したい (NGLE, 2009: 46.12m-s; Álvarez, 1990b)。



それぞれの例文を以下に挙げる。

① 説明的原因

- (27) Sufre la pena, *pues* cometiste la culpa. (Esbozo, 1973: §375)

② 推断 (副詞)

- (28) Tú cometiste la falta, sufre, *pues*, la pena. (Esbozo, 1973: §375)

③ 推断 (接続詞)

- (29) Te sirven; *pues* pagas. (Alarcos, 1992, p. 17)

④ 冗語

(30) ¿Y qué se necesita? —*Pues* la verdad es que no lo sé muy bien. (NGLE, 46.12ñ)

「冗語」とひとくくりにはしているが、多様な意味を持つ。Álvarez (1990b, p. 312) は「強調」(enfático), 「引継ぎ」(continuativo), 「会話の支え」(soporte conversacional)などを挙げている。また、「沈黙を破る」, 「対話を再開」などの機能がある (NGLE, 2009: 46.12ñ)。

さて、本論の対象としている推論接続詞の用法は③に相当する。では、これが等位接続詞かどうかを以下、確認する。まずは、等位の接続詞前置テストを試みると、

(31a) Tú no sabes nada, *pues* cállate.

(31b) *Tú no sabes nada, y *pues* cállate.

と *y *pues* の連続は不可能である。したがって、この場合の *pues* は等位接続詞であるとわかる。

推論用法としては、②副詞と③接続詞としての用法がある。

(32a) Mañana es fiesta, no habrá, *pues*, clase.

(32b) Mañana es fiesta, no habrá clase, *pues*.

(32c) Mañana es fiesta, *pues* no habrá clase.⁹⁾

上記の3例の意味はほぼ同じであるが、*pues* は後半の文の冒頭以外に文中 (32a), または文末 (32b) に置くことができる。しかし、(32c) のみが接続詞である。後半の文の文頭でアクセントを失ったことにより *pues* が接続詞化したと言えるであろう¹⁰⁾。

次に推論の *pues* (③) と説明的原因の *pues* (①) の関係について触れておく。それぞれ「原因」と「結果」の関係を表現する接続詞であるが、因果関係の順序が反対である (Alarcos, 1992, p. 15)。

(33a) Come; *pues* engorda. — 「ゆえに」推論文

【原因→結果】

(33b) Engorda, *pues* come. — 「~ので」原因文

【結果→原因】

Alarcos (1992, pp. 15, 19) によると *pues* の前のポーズは推論文 (33a) の方が原因文 (33b) よりも長い。また、これらの接続詞 *pues* の統語的働きは異なる可能性が大きい。原因の *pues* に転倒テストを適用してみる。転倒が不可であるとする研究者も多いが、以下のような古いスペイン語の例も存在する。

(34) *Pues* todas las aves vuelan, volad vos. (Alarcos, 1994: §435; 1992: p. 14)

このように古語では *pues* の節が前半部に来ることが可能であった。現代語ではこの語順はほぼなくなっているが、これは *puesto que* に取って代わられてしまった結果、前半部での用法が珍しくなってしまっただけであって、本質的には前半部、後半部ともに位置することが可能であろう (NGLE, 2009: 46.6n; Jiménez, 2011: p. 37; Álvarez, 1990b: pp. 314-315; Alarcos, 1992: pp. 13, 14, 22, etc.)。こう考えると原因の *pues* は従位の接続詞という結論になる。

接続詞 *pues* が等位であるか従位であるかという大雑把な議論は不毛なものである。なぜなら、この語が多機能であるがゆえに異なった性格の *pues* を混同して議論していることになるからである (Alarcos, 1992: p. 23)。原因の *pues* は従位接続詞であり、推論の *pues* は等位接続詞である¹¹⁾。

推論の接続詞としての *pues* の使用は、頻度が低いようである。しかし、だからといってその存在を否定はできない。また、推論の接続詞としての使用も、ポーズ後の文頭に来ることが多く、「文₁, *pues* 文₂」という複文構造の使用は少ない。頻繁に使用される説明的原因の *pues* と紛らわしいから避けられているのかもしれない。

3. 5. De modo (manera, forma, suerte) que

名詞 *modo, manera, forma, suerte* のいずれかを伴った接続詞句である。*de suerte que* は古典スペイン語では広く使用されたが、現代語では文語的である (NGLE, 2009: 46.12b)。*De modo que* の記述に関して様々な機能を働く異なった形式の混乱が見られる。相関詞 *tal* のあるなし、直前のポーズのあるなし、後続の節中の叙法選択、等の要因によっていくつかのケースに分けて考察すべきである。少なくとも以下の4種類を区別する必要があると考える (Álvarez, 1999: §58.3, 58.6; NGLE, 2009: 46.12f-g)。

① De tal modo que (相関結果構文)

この構文は以下の②~④とは異なり慣用句ではない。したがって、名詞が複数になったり、不定冠詞が付いたり、前置詞が変わったりの変種 (*de tales maneras que, de un modo tal que, en tales formas que, etc.*) が可能である。以下の例文 (35a) と (35b) の意味は同じである。

(35a) *Escríbelo de tal manera que todo el mundo lo entienda.* (NGLE, 2009: 46.12f)

(35b) *Escríbelo de una manera tal que todo el mundo lo entienda.*

この形式が推断の働きをすることもある。

(36) *El actual sistema nos obliga a elegir a una lista, es decir, a un partido, de tal forma que realmente no somos representantes por nadie.* (NGLE, 2009: 46.12g)

統語的な分析をすると *tal...que* という相関構文と考えるべきである。つまり、*tanto...que* や *así...que* と同列の *tal...que* 構文であり、*tal* が *modo* 等に前置、または後置された形式であると考えられる。また、*que* 以下の文が *modo* の直後に後接せず、離れている場合も当然あり得る。

(37) *Perdió de tal modo el control que nadie pensaba que estuviera fingiendo.* (GDLE, 1999: 58.3.)

この相関構文から *tal* が省略されたものが以下の *de modo que* であると考えれば合理的である (NGLE, 2009: 46.12f, 25.13n; Garcés, 1994: p. 151)。

② De modo que (様態の副詞句)

上記①とは異なり *de modo que* が変化したり、間に他の要素の挿入を許したりすることはない。つまり、固定された慣用表現である。

(38a) *Concluyó en un susurro de modo que Gaal apenas pudo oírle.* (Álvarez, 1999: 58.3)

(38b) *Concluyó en un susurro de modo inaudible.* (*ibíd.*)

(38c) *De modo que Gaal apenas pudo oírle, concluyó en un susurro.*

上記 (38a) において *de modo que apenas pudo oírle* は動詞 *concluyó* の様態の状況補語である。したがって、(38b) のように *de modo inaudible* と言い換えが可能である。また、(38c) のように前置できるのは *de modo que...* が状況補語であるがゆえである。

③ De modo que+《接続法》(目的節を導く接続詞句)

以下の例文では接続法が使われており、この場合は *de modo que* は目的の接続詞句である。

(39) *Y, por lo tanto, creo muy conveniente que os disfracéis, de forma que nadie os reconozca.* (NGLE, 2009: 25.13o)

つまり、*de forma que...* は様態の状況補語ではなく、主節 (*os disfracéis*) の外部にある目的の従属節であると言える (NGLE, 2009: 25.13o)。

④ *De modo que*+《直説法》(推断の等位接続詞句)

②～③と同じく無変化の固定された慣用句であるが、③と同じく前の文の状況補語ではない。前の節と *de modo que* の前にはポーズ (コンマ) が置かれる (NGLE, 2009: 25.13ñ)。

- (40) Yo no tenía sueño, *de manera que* tomé el libro de gramática de debajo de la almohada y me dispuso a leerlo. (NGLE, 2009: 25.13ñ)

この例文で *de manera que* は前の文の動詞を修飾するのではなく、また主節全体の文修飾語となるのでもなく、前の文全体と後ろの文全体を連結しているとみなしえる。つまり、この④こそが推断の接続詞として機能するものであり、*de modo que* 節の叙法は直説法である (NGLE, 2009: 25.13ñ)。その意味するところは「推断」なので当然、*así que* や *y por tanto* 等との言い換えが可能である (NGLE, 2009: 25.13ñ)。

上記をまとめると、*de modo que* は大別して、① 相関構文、② 様態の副詞句、③ 目的の接続詞句、④ 推断の接続詞句、となる。結局のところ本論という推断文は④であるが、これが等位文であることを証明するために §2 で使ったテストを適用する。

まず、倒置性テスト (*prueba de reversibilidad*) を試みると、

- (41a) Mañana es fiesta, *de modo que* no habrá clase.
 (41b) **De modo que* no habrá clase, mañana es fiesta.

このように (41b) が不可であることは、この文が等位である証拠と言える。

続いて、隣接性テスト (*prueba de contigüidad*) を適用する。

- (41a) Mañana es fiesta, *de modo que* no habrá

clase.

- (41c) *Mañana es fiesta, y *de modo que* no habrá clase.

De modo que に同じく等位の接続詞 *y* を前置することができない。これもまた *de modo que* が等位の接続詞句であることを意味する。

3. 6. 推断文とその周辺

ここまでで推断の接続詞であるもの5種が確定できたので、念のため推断接続詞と紛らわしいが実際にそうでないものについても見ておきたい。

3. 6. 1. 談話標識 (*marcadores discursivos*)

推断の接続詞と混同されることが多いのがいわゆる談話標識の *entonces*, *consecuentemente*, *en consecuencia*, *por consiguiente*, *por (lo) tanto* 等である (NGLE, 2009: 46.11k)。これらのカテゴリーは副詞 (句) である。

これらが接続詞でないことは、様々なテストによって明らかにできる。例えば、等位接続詞 *y* が前に来ることができるので (*y entonces*, *y consecuentemente*, *y por tanto*, etc.), 接続詞ではない (NGLE, 2009: p. 3518)。

また、接続詞ではないので文中での場所移動が可能である (*Entonces, ¿vienes con nosotros? ~ ¿Vienes, entonces, con nosotros? ~ ¿Vienes con nosotros, entonces?*)。

また、後にポーズが置ける。例えば、*por tanto*, *alguien se lo dijo* とコンマを置けるが、**así que*, *alguien se lo dijo* とはできない (NGLE-*Manual*, 2010: 46.8.3b)。

3. 6. 2. *Así pues*

本論の最初で (§1) 見たように *así pues* を推断の接続詞と考える研究者もいる。NGLE (2009) は両論が混在している。一方で、接続詞ではなく談話標識であると主張している (46.12b, 46.12k, 30.13n, etc.)。

理由は、*así pues* の後にポーズを置くことが可能だからである (30.12d, 30.13k)。例えば, *Así pues, hemos de estar preparados* とは言えるが, **Así que, hemos de estar preparados* とは言えない。また, 挿入的に使用できるので接続詞ではない (*La reacción resultó, así pues, totalmente inesperada*, *NGLE*, 2009: 30.12.e)。

一方, 反対に接続詞だと述べている箇所がある (46.11ñ, 46.12h)。その根拠は, 他の等位接続詞との隣接 (**y así pues*) が不可なことである。しかし, これには反論できる。例えば, Jiménez (2011) は以下の例を挙げる。

(42) *Te empeñaste en hacerlo, (y) así pues, afronta las consecuencias.* (Jiménez, 2011: p. 40)

通常のネイティブスピーカーの語感では *así pues* が正しく, 自然である。接続詞 *y* の前置 (*y así pues*) は確かに不自然であるが, 非文とまでは言えないであろうとの判断を得た。結局, *así pues* は推断の接続詞とは認めがたい。

3. 6. 3. *De ahí que (de aquí que)*

文語的な接続詞句である。*que* 以下の節には通常, 接続法が来るが, 直説法が来ることもある (*NGLE*, 2009: 25.13p) *De ahí que* は以下の理由で推断の接続詞とは言えない。

① *Y de ahí que* と等位の *y* と隣接させることが可能である (*NGLE*, 2009: 46.11ñ)

(43) *Y de ahí que el espíritu teológico o abogadesco sea en su principio dogmático.* (*NGLE*, 2009: 46.12h)

つまり, 隣接性テストによって等位接続詞ではないと言える。

② *De ahí se deduce (se sigue, se desprende, se infiere, etc.) que* のように省略されていると想定される動詞を復活させることができる (*NGLE*, 2009: 46.12i; Álvarez, 1999: 58.7.3)¹²⁾。つまり, *que* 以下は主語の働きをする名詞節である。

③ *De ahí, que* と *que* の前にコンマを入れることができる (*NGLE*, 2009: 46.12i; 福畠, 1993: p. 11)

(44) *De ahí, que esta enfermedad, una vez declarados sus primeros síntomas ya sea incurable y mortal en pocos días.* (*NGLE*, 2009: 46.12i).

④ 意味的にいって *de ahí que* は他の推断構文と異なり, 後半部の文が従たる情報 (旧譲歩など) である (福畠, 1993: pp. 5-7, etc.)。

これらのことから *de ahí que* は完全な成句ではなく, 推断接続詞への文法化途上の状態であると言える。

4. 等位文内での推断文の位置づけ

4. 1. 等位文の下位区分と種類

前節までで見たように, 本論では推断文を等位文の1種と位置付けた。そこで以下では, さらに等位文全体における推断文の位置づけを見てみよう。等位文をさらに下位区分すると「単純等位文」(*coordinadas simples*) と「多重等位文」(*coordinadas múltiples*) に分けられる (Nakai, 2018)。前者の接続詞を「二項接続詞」(*conjunción binaria*)、後者のものを「n-項接続詞」(*conjunción n-aria*) と呼ぶ。

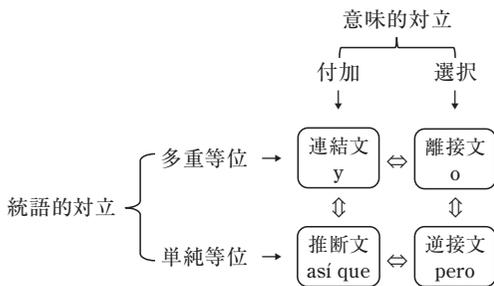
より根源的, 基本的な等位文とでも言えるのは後者であろう。*y* と *o* で代表され, ラテン語からそのまま引き継いだものである。研究者の中にはこちらのみを本来の等位接続詞とみなす, 言い換えれば等位接続詞を狭く限定している者もいる (Rojo, 1978;

Jiménez, 2011)。しかし、筆者は単純等位と多重等位を共に等位の低位区分であるとするべきと考える¹³⁾。推断文は逆接文 (adversativas) とともに単純等位文を構成する。つまり、等位文は以下の4つの種類からなる。

等位文 { 多重等位文：連結文 (y), 離接文 (o)
単純等位文：逆接文 (pero), 推断文 (así que)

4.2. 等位接続詞体系内での関係

さて、上記4種類の等位接続詞はその意味的特徴から大きく2つに分類できる。それは「付加」(adición)と「選択」(selección)である。前者では2つの接続される要素の同時存在を表現する。後者では2つの要素のいずれかが成立したり、一方を否定する関係にある。「付加」的意味を持つものは「連結」と「推断」であり、「選択」的意味を帯びたものが「離接」と「逆接」である。この関係は以下のように図示することができるであろう。



4.3. 推断文の特異性

ここまででは推断文が他の等位文と共通する統語的、意味的性格を持つことを見てきたが、次に特異性の方も確認しておきたい。

① 「文+文 接続」以外の不可能性

他の等位文 (連結文, 離接文, 逆接文) は、同じ機能の文構成要素 (語, 句, 前置詞) を繋ぐことができるが、推断文は文のみしか連結できない

(Moreno, 1979: p. 42; *Esbozo*, 1973: 3.22.3. 注4; Álvarez, 1995: p. 44, 1999: 58.61; etc.)¹⁴⁾。例えば、*una casa grande y espaciosa, una casa grande pero incómoda* 等は可能であるが¹⁵⁾, **una casa pequeña luego barata* とは言えない。しかし、文以外の要素を繋ぐことを等位文の必須条件とまでは考えるべきではない。もしそうすると推断文の適切な分類が不可能である。実際、*Esbozo* (1973) 等はこれを根拠の1つとして推断文を従位としたが、かえって不合理な結果に陥っている。推断文は従位の性質を満たさないことの方が多いからである。

② 強勢を持つ接続詞

接続詞は本来弱勢である。しかし、接続詞句の *así que* と *de modo (manera, forma, suerte) que* は強勢を保持している (NGLE, 2009: 46.12h)。つまり、文法化が完了して完全な接続詞になり切っていないと考えられる。しかし、他の多くの理由から「ほぼ接続詞」化はしているとみなすべきであり、もし接続詞でないならば副詞 (句) とするべきであろうが、こちらの方が不都合が多い。例えば、副詞であるのに位置を移動できないなどの大きな矛盾が生じる (**Pienso, existo luego* は不可。一方, *Pienso, existo, por tanto* は可)。

③ 文と文の結びつきの程度

等位の結びつき度には「程度の差」があると考えられる研究者がいる (Moreno, 1979: p. 48; Jiménez, 2011: p. 42)。つまり、典型的な等位文 (~ y ~, ~ o ~) が最も強く、次いで逆接 (~ pero ~), 最後に推断 (~ luego ~) は, pero と同等か、さらに結びつきが弱いものとするべきかもしれない (推断の *pues* については既に §3.4 で見た)。

言い換えれば、接続詞の中でもっとも典型的な (prototípico) 等位接続詞は、連結 (y) と離接 (o) の接続詞であろう。逆接の接続詞 (*pero*) はそれらに比べて典型度が落ちると考える。推断 (*luego*) はといえば、さらに非典型的、周縁的な存在であるとい

表2 等位文の特徴の比較

等位文のタイプ (代表的接続詞)	多重等位が可	付加 (-選択)	「句+句」等位が可	強勢
連結文 (y)	+	+	+	-
離接文 (o)	+	-	+	-
逆接文 (pero)	-	-	+	-
推断文 (así que)	-	+	-	±

ってもよいのではないだろうか。

4.4. 総括

上記で見た4種類の等位文の特徴を表2に表してみよう。

このように等位文は4タイプに分類できる。そしてこれら4種類の言語形式は閉じた体系をなしていると言える。

等位文の構造を以下(図1)に図示する。

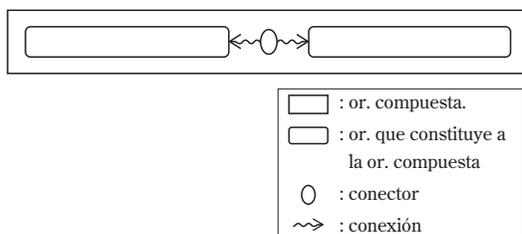


図1 等位文の構造 (Nakai, 2018, p. 65より)

このように推断文を含めて4種類の等位文は前半の文と後半の文が等位接続詞で外的に接続されるという構造をしている。接続詞は従位文や二極文とは異なり複文を構成する文のいずれにも統合されない独立した要素であることが等位文の最大の特徴となっている。

まとめ

ここまで検討してきたことを以下に列挙すると、推断文は、

- ① 相関の結果構文とは統語構造が根本的に異なる

り、独立したカテゴリーとして分離すべきである。

- ② 複文の伝統的な分類(等位文, 従位文)では等位文に相当する。また、並置文でも二極文でもない。
- ③ 等位文の下位区分としては、推断文は逆接文とともに単純等位文である。
- ④ 推断文の言語形式は、*luego, así que, conque, pues, de modo que*の5種類である。

ただし、推断文は等位文の他の3つの下位区分に比べて文法化が完全でないカテゴリーである。④で挙げた接続詞(句)には全て推断の接続詞以外の用法が存在する。特に *pues* の用法は非常に多様である。しかし、推断の接続詞の用法に限定すれば、推断の *pues* の文は等位文の特徴を有していることが確認できた(一方、原因の接続詞 *pues* 節は従位である)。

このように推断文を等位文の一種であると明確に位置づけることは、適切な記述と分析の出発点として必要不可欠であり、今後の具体的で詳細な研究に繋がる。

注

- 1) 「推断文」はあまり一般的でない用語なので、最初に簡潔に説明をしておきたい。本稿の研究対象は、「oración ilativa」(もしくは「construcción ilativa」)と呼ばれるものであるが、訳語として「推論文」、「推理文」、「推定文」、「連結文」、「結論文」、「結果文」、「引継ぎ文」、「順接文」などが種々が使用されている。本論では「推測して判断する」という意味を込めて「推断文」を採用している。「推断」

- は松平, 国原『新ラテン語文法』(1992, p. 230)等で採用されている。スペイン語 “ilativa” はラテン語 ILLATIVUS に由来する。これは INFERRE 「推論する」の過去分詞である。さらに INFERRE は, IN + FERRE, すなわち「内に」+「運ぶ」に由来し, 「推論する」を意味する。
- 2) 本稿の関心は文間関係 (relación interoracional) であるので, また煩雑になるのを避けるため, この従位文の列挙からは名詞節, 形容詞節, 状況補語節 (時, 場所, 様態) を省いている。また, 目的文は名詞的従属節が間接目的語として働いているものと考えられていた。
 - 3) 等位の原因文は, *que, pues*, 古語 *ca, pues que, porque, puesto que, supuesto que* であり, 従位の原因文は, *porque, de que, ya que, como, como que* としている (それぞれ §346 と §398)。
 - 4) López García (1994, 1999) と Hernández (1984) では, 推断文を並置文とみなすとは明記されていないが, 等位文の個所でも従位文の個所でも触れられていないので, 並置文と考えていた可能性が高い。
 - 5) より正確に言うと, 等位文と従位文に加えて並置文 (yuxtapuesta) も結果構文の下位区分としてしている。Álvarez (1999) でいう並置文の結果構文とは, ①いわゆる談話標識 (*por lo tanto*, etc.) を用いた構文 (*Mañana es fiesta; por lo tanto no habrá clase*), ②この著者の言うところの「結果前置構文」(consecutivas antepuestas) (*Parecían pintadas de bermellón, tan rojas son en esa época del año*) のことである。
 - 6) López (1999: 54.6.1.2) の例文。López は④の例はないとしているが, 非文の例はいくらでも作れるので, 本論では (14) を基に (15) の例文を作成した。
 - 7) Cf. NGLÉ (2009): 42.1, etc.
 - 8) もちろん従属文中にも命令文が現れることもあり得ないことはない。Cf. 川口 (2014)。
 - 9) スペイン人のインフォーマントによるとこの例は, 推断と説明的原因の両方の解釈が可能であるが, ここでは推断の例として扱う。
 - 10) この通時的変遷は逆接の *pero* (< PER HOC) と同様である。*pero* は副詞句から接続詞化する際,

- 強勢を失い, その位置は後半文の冒頭に固定された。そのため類義語の *sin embargo* 等と共にできるようになった点も *pues* と同様である。*Mañana es fiesta, pero habrá, sin embargo, clase. / Mañana es fiesta, pues no habrá, por tanto, clase.*
- 11) 現代のイタリア語 *poiché* やフランス語 *puisque* のように同じ起源の原因の従位接続詞が存在することも原因の *pues (que)* が従位であることの傍証となろう。いずれもラテン語比較構文から派生した接続詞 POSTQUAM に由来する。一方, 単独の POST は時の *pues* を経て推断の *pues* に変化したと想定できる。
 - 12) 福嶋 (1993: pp. 3-5) は *deducir* や *seguir* といった動詞が省略されたとする説に懐疑的である。
 - 13) その理由は Nakai (2018, pp. 64-65, 71-72), Camacho (1999): p. 2638, 注1を参照。
 - 14) 文であってもそれが名詞節化された場合, その実際の機能は名詞なので推断の接続詞で連結することはできない。例えば, *hablaba muy rápido*, *así que no le entendieron nada* を名詞節化し, 以下のように *Dicen que...* にはめ込むと, *Dicen que hablaba muy rápido y que no le entendieron nada* と *así que* を *y* に置き換える必要がある。*Dicen que hablaba muy rápido*, *así que no le entendieron nada* とすることはできるが, この場合は *así que* は *hablaba muy rápido* と *no le entendieron nada* ではなく, *Dicen que...* と *no le entendieron nada* を等位接続している (Álvarez, 1995, p. 44)。
 - 15) Alcina & Blecua (1975): p. 840の例。

参考文献

- Alarcos, Emilio (1992): “Pues”, *Gramma-temas 1*, León, Univ. de León, pp. 11-26.
- (1994): *Gramática de la lengua española*, Madrid, Espasa.
- Alcina, Juan & José Manuel Blecua (1975): *Gramática española*, Barcelona, Ariel.
- Álvarez, Alfredo (1990a): “Conectores y grupos oracionales consecutivos”, *Dicenda*, 9, pp. 11-29.
- (1990b): “Funciones y valores de *pues* en español”, *Actas del Congreso de la Sociedad*

- Española de Lingüística. XX Aniversario*, I, Madrid, Gredos, pp. 307-317.
- (1995): *Las construcciones consecutivas*, Madrid, Arco/Libros.
- (1999): “Capítulo 58: Construcciones consecutivas”, en I. Bosque & V. Demonte (dirs.), *Gramática descriptiva de la lengua española*, III, Madrid, Espasa, pp. 3739-3804.
- Camacho, José (1999): “Capítulo 41: La coordinación”, en I. Bosque & V. Demonte (dirs.), *Gramática descriptiva de la lengua española*, II, Madrid, Espasa, pp. 2635-2694.
- 福薦 (1993): 「De ahí que 構文について」『神戸大論叢』44.6, pp. 1-22.
- Garcés, M.^a Pilar (1994): *La oración compuesta en español. Estructuras y su nexos*, Madrid, Verbum.
- Hernández, César (1984): *Gramática funcional del español*, Madrid, Gredos.
- Jiménez Juliá, Tomás. (2011): “Conjunciones y subordinación en español”. *Verba*, 38, pp. 7-50.
- 川口正通 (2014): 「譲歩節における命令法の使用について」 *Hispánica*, 58, pp. 23-43.
- López García, Ángel (1994): *Gramática del español, I. La oración compuesta*, Madrid, Arco/Libros.
- (1999): “Capítulo 54: Relaciones paratácticas e hipotácticas”, en I. Bosque & V. Demonte (dirs.), *Gramática descriptiva de la lengua española*, III, Madrid, Espasa, pp. 3507-3548.
- Martínez, José Antonio (1984-85): “Conectores complejos en español”, *Archivum*, XXXIV-XXXV, pp. 69-90.
- (1994): *La oración compuesta y compleja*, Madrid, Arco/Libros.
- 松平千秋, 国原吉之介 (1992): 『新ラテン語文法』東洋出版.
- Montolio, Estrella (2001): *Conectores de la lengua escrita*, Barcelona, Ariel.
- Moreno de Alba, José (1979): “Coordinación y subordinación en gramática española”, *Anuario de Letras: Lingüística y filología*, 17, pp. 5-58.
- Nakai, K. (2018): “Redefinición de las oraciones bipolares y una nueva clasificación de las oraciones compuestas del español”, *Hispanica*, 62, pp. 53-78.
- Real Academia Española (1931): *Gramática de la lengua española*, Madrid, Espasa-Calpe.
- (1973): *Esbozo de una gramática de la lengua española*, Madrid, Espasa-Calpe.
- Real Academia Española & Asociación de Academias de la Lengua Española (2009), *Nueva gramática de la lengua española*, Madrid, Espasa Libros.
- (2010): *Nueva gramática de la lengua española. Manual*, Madrid, Espasa Libros.
- Rojo, Guillermo (1978): *Cláusulas y oraciones*, Anexo 14 de *Verba*, Santiago de Compostela, Univ. de Santiago de Compostela.

Oraciones ilativas en español : hacia el establecimiento de su categoría en el marco de las oraciones coordinadas

NAKAI Kuniyoshiⁱ

Resumen : Las oraciones “ilativas” (*Pienso, luego existo*), tradicionalmente llamadas también “consecutivas”, han sido consideradas como coordinadas o como subordinadas según los autores dentro del marco de las oraciones compuestas del español. Incluso hay estudios que las tratan como yuxtapuestas o bipolares.

Sin embargo, si se las analiza desde el punto de vista sintáctico utilizando varias pruebas lingüísticas, podríamos comprobar que son oraciones coordinadas. Por ejemplo, prueba de reversibilidad: *Ella ya lo sabía*, así que *alguien se lo había dicho*. → *Así que *alguien se lo había dicho*, *ella ya lo sabía*; prueba de contigüidad de conjunciones: *Erasmus está enfermo*, así que *no sale*. → **Erasmus está enfermo*, y así que *no sale*; etc.

Desde el punto de vista semántico las oraciones ilativas se oponen a las adversativas, porque estas expresan en la segunda oración alguna oposición contra lo denotado en la primera oración (*Llueve, pero saldremos*) mientras que las ilativas expresan la consecuencia natural (*Llueve, así que nos quedaremos en casa*).

Una vez definidas como coordinadas se buscará su estatus dentro de la clase de las mismas. Las ilativas constituyen una subclase de coordinadas “simples” (binarias) junto con las adversativas (*pero*), enfrentándose estas a otra subclase: coordinadas “múltiples” (n-arias), que constan de las copulativas (*y*) y disyuntivas (*o*).

Las unidades lingüísticas que forman el grupo de las conjunciones ilativas son: *así que, conque, luego, pues, de modo (manera, suerte, forma) que*, aunque hay que tener en cuenta que estas no están gramaticalizadas por completo, sobre todo la conjunción *pues* (átona), que tiene usos “ilativo” y “causal explicativo”, aparte de como adverbio (tónico).

Palabras clave : oraciones compuestas, ilativas, consecutivas, coordinadas, subordinadas

i Catedrático, Facultad de Ciencias Sociales, Universidad Ritsumeikan